

## <エッセイ>井上和子先生の御退任にあたって

著者名(日)	上田 由紀子
雑誌名	言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要
巻	7
ページ	2013/09/100:00:00
発行年	2001-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00000357/">http://id.nii.ac.jp/1092/00000357/</a>

## 井上和子先生の御退任にあたって

上田 由紀子

井上和子先生の御退任にあたり、神田外語大学・大学院卒業生を代表して、井上和子先生に心から感謝の気持ちを申し上げたいと思います。

井上先生との13年間は、私自身の成長であり、また、神田外語大学・大学院の歴史そのものでもありました。先生は、「言語学」という学問の存在すら知らずに入学した私に、忍耐強く、「学問」の喜びを吹き込んで下さったのだと思います。

学部時代は、先生との読書会が私の全てでした。当時の私は、火曜日、5時から読書会の準備の為に、残りの6日間を費やしていました。にもかかわらず、Chomskyの*On Wh-Movement*のreviewは、「これは、下書きですね。」と返されたのですから、この読書会での先生の「忍耐」がいかばかりのものであったかはいうまでもありません。先生の惜しみない愛と忍耐の元で、私は、感謝の気持ちを覚えると共に、学び、発見する喜びを知り、いつしか大学院で言語学を専攻したいと強く願うようになりました。

井上先生が私たちに与えて下さったのは、ただ、学問する場だけではありませんでした。先生は、私たちの目の前で、「夢」を「現実」へ次々と変えていかれました。大学院設立、そして、COE、これらの夢の実現は、私たち学生の物事への挑戦を学問に対しても、人生に対しても、プラスの方へ変えていったような気が致します。

私たちは、井上先生から、さらには、井上先生の教えを受けた多くの先生方から本当に惜しみない学びの時と励ましを受けて参りました。「多くを与えられたもの

は、人にも多くを与えることができるようになる。だから、与えてもらえるときは、有り難くもらっておけばいい。」これは、故山田洋先生が井上先生のお話をなさりながら、私たちにおっしゃったお言葉です。先生ご自身が井上先生から学問的にも人間的にも多くを与えられてきたこと、そして、私たち神田の学生が将来、誰かに与えるときが来たときに、惜しみなく多くを捧げることができるように、今、与えられているものやチャンスを大切に自分のものとしていくようにとおっしゃり、そして、最後に、「僕は、井上先生のまねをしているだけ。」と少し恥ずかしそうにおっしゃったのを記憶しています。

井上先生との出来事は、感謝の気持ちと共に限りありませんが、今現在、それらを「思い出」と呼ぶのは、ふさわしくないように思われます。私も、まだ、完成させなければならない仕事が残っておりますし、たとえ大学院の公のお仕事から退かれたとしても、先生の辞書に「不可能」の文字がないのと同様に、先生の御研究生活に「御退任」の文字もないように思われます。組織の御公務から少し解放されたとすれば、先生の御研究への情熱はさらにパワーアップされることでしょう。皆、今から、その時を恐れつつも期待し、心して待っております。「昨日ね、データを見ていて、ものすごく面白いこと発見したの。」と満面の笑みで、熱くお話になるにちがいありません。先生の瞳の輝きとお話の勢いに負けぬよう、そして、先生に「なるほど。これは、なかなか面白いね。」と仰っていただけるように私たちも日々頑張りたいと思います。

やはり、井上先生には、「今後とも宜しくお願い致します。」と申し上げてこの筆をおきたいと思えます。